

## 仏壇

古い日本の産業史の中でも、仏教に関する宗教用具の仏壇は 1500 年の時をさかのぼることのできる産業といえます。

六世紀中頃に仏教が伝来し、現在国宝になっている「玉虫厨子」が、もっとも古い宗教用具の始まりと言われていました。

島原の乱以後、幕府は民衆を仏教に帰依させるよう宗門改めを行いました。全国の家では仏壇を祭ることで仏教徒である証明にしたため、仏壇の製造が全国で本格的に始まりました。

大阪、京都では腕の良い職人が高級仏壇をつくり全国各地へ販売するようになります。また、各地方城下町でもそれぞれ土地の宗派に見合う仏壇の製造が始まります。東海道・中山道では、彦根、名古屋、桑名、三河、北陸地方では石川県の金沢壇、新潟壇、富山県の高岡壇、中国地方では広島壇、九州では八女壇、東北では山形壇と特色のある仏壇産地が生まれました。以上の産地はいずれも、伝統的工芸品の指定を受け、現在も手造りの高級品を製造し続けています。

明治になり横浜・神戸などの港が開港すると、諸々の輸入品に加え、紫丹材、黒丹材が大量に入荷され、これらの材を使った唐木仏壇が東京壇として製作されるようになり、関西の大阪壇とともに唐木仏壇の中心となっていました。

昭和になると、大阪壇の製造を徳島の木工業者に依頼したことで徳島が唐木仏壇の主流となっていきます。

静岡の仏壇産業は戦後に発展した産業で、昭和 27 年(1952)頃から東京壇の製作を、静岡の木工業者が依頼されたことを契機に、従来の手作り手塗りの方法から木工機械、塗装機械を駆使するようになりました。

昭和 33 年(1958)、この年は終戦から 13 年目にあたり、13 回忌の法要を営む家庭が多かったせいか、仏壇の需要が突然大量に発生しました。しかも大産地であった東京の生産体制が完全に崩れていたため、この需要に応えることが出来なかったことで、静岡仏壇業界に大量の受注が入り、大量生産時代を迎えました。そして、この時期には、他の木工業界からの転業者が続々と参入してきました。

昭和 37 年(1962)に相互扶助、資材の共同購買などを目的にした任意組合「静岡仏壇卸商組合」が設立され、昭和 41 年(1966)7 月「静岡仏壇卸商工業協同組合」を設立しました。